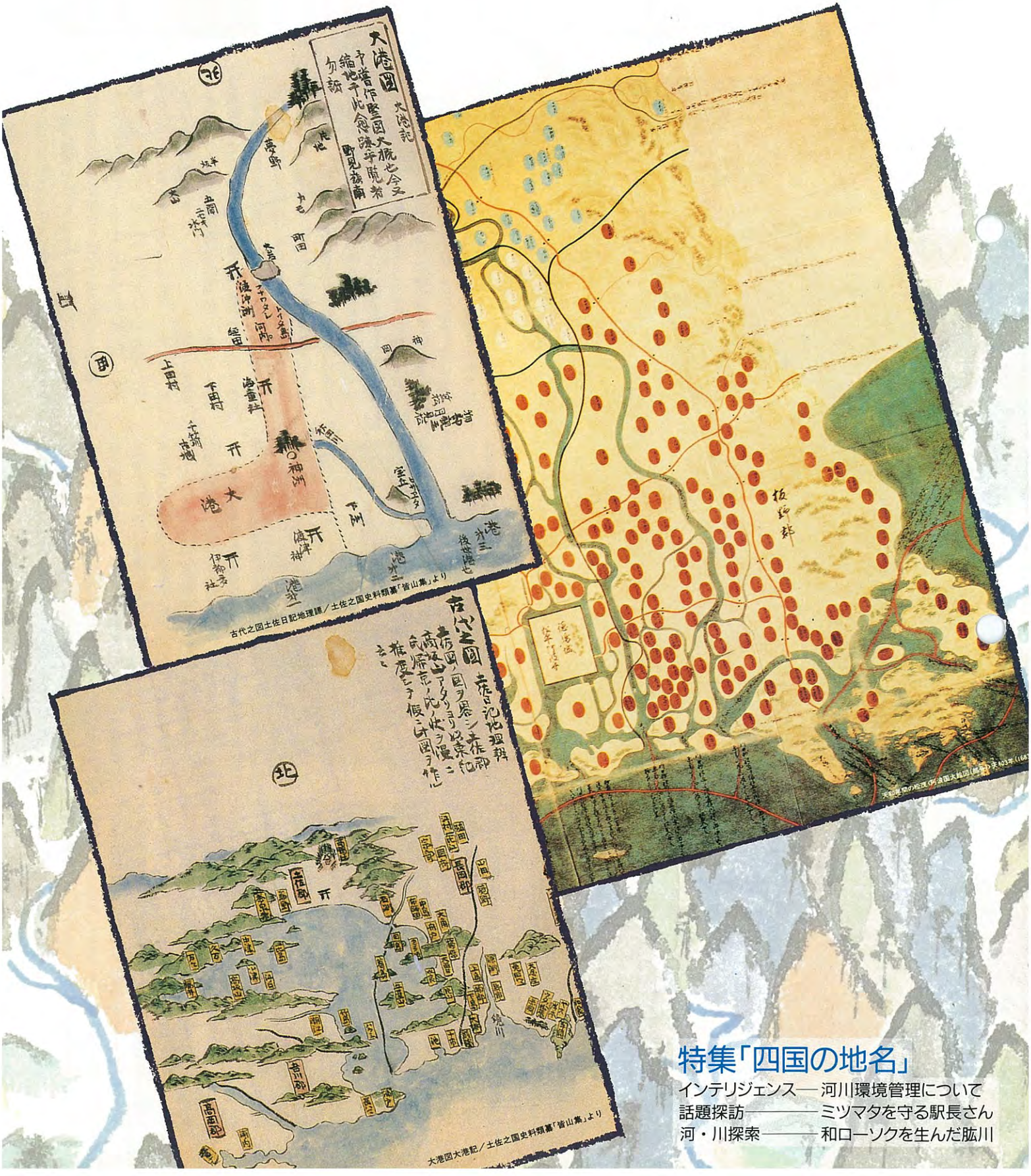
あめんぼ

四国の川を考える会

川の情報紙

MARCH 1991 Vol. 12



特集「四国の地名」

インテリジェンス――河川環境管理について

話題探訪――ミツマタを守る駅長さん

河・川探索――和ローソクを生んだ肱川

インテリジェンス

“あなたの手で、もっと花のある川を”
（ラブリバー制度について）

趣旨

河川管理の理念は河川を『総合的に管理』することにより『公共の安全を保持し、『公共の福祉を増進』することであります。この河川管理には治水・利水・河川環境の保持等3つの面がありますが、中でも河川環境は国民の生活環境形成に一層重要な役割を担うべき状況にあります。河川は身近に触れることのできる美しい自然環境を代表するものであり、絵画、文学等を通じて、私達の精神文化にも大きな影響を与えてきました。

この河川空間が持つ水と緑のオープンスペースとしての特質に対して流域の期待感が高まっている中で、この河川という貴重な財産の安全性を確保しつつ、さらに素晴らしいものとし、多くの人々が親しめ、安らぎを与えてくれる、そういう環境を守り育てていく必要があります。

このような理念のもと『ラブリバー制度』は、ボランティア活動として堤防の草刈り・清掃等を行う地域住民（河川愛護団体等）に対しては、河川敷を住民の植栽や花壇としての利用に開放し、住民の皆さまとともに、河川の良好な維持と潤いのある水辺空間の形成を図ることを目的として平成元年度に設けられた制度です。

協調

ラブリバー制度では、地域住民（河川愛護団体等）、市町村および河川管理者の3者が一体となって次のような活動を行います。

地域住民（河川愛護団体等）の活動

地域住民（河川愛護団体等）は、堤防の草刈り・清掃等の河川愛護活動と、河川敷への植栽、花壇等の整備、維持活動を行います。

市町村による支援。

市町村は河川環境基金の設立・運用等をはじめ、地域住民（河川愛護団体等）によるラブリバー活動を支援します。

河川管理者による支援。

河川管理者は、地域住民（河川愛護団体等）が市町村と一体となって展開するラブリバー活動を支援するため、立木伐採、草刈り、簡易な敷地整正、張芝等を前もって実施します。

対象河川区間。

この『ラブリバー制度』は一級河川及び二級河川の区間が対象になります。

河川敷の春・吉野川

ラブリバー制度はこのような手順で進められます。

ラブリバー計画の作成
市区町村長・河川愛護団体等
河川愛護団体等による堤防の草刈、清掃等の河川愛護活動計画、植栽・花壇等の水辺空間利用計画および市区町村によるラブリバー計画への支援計画等をまとめて河川管理者に提案する。

◀ 河川管理者に提案

支援整備計画の作成
河川管理者
提案されたラブリバー計画が適正である場合、これを支援するための河川管理者による立木伐採、草刈、敷地整正、張芝等の支援整備計画を作成し、ラブリバー計画の推薦と併せて河川局長に認定を申請する。

◀ 河川局長に申請

ラブリバー区間の認定
建設省・河川局長
ラブリバー計画に定められた水辺空間利用計画および支援整備計画が適正と認められる河川区間をラブリバー区間として認定する。

◀

計画の実施

河川愛護団体等	ラブリバー計画による活動の実施
市町村	河川愛護活動等に対する支援の実施
河川管理者	支援整備計画による整備の実施

その他
●めざましい活動成果をあげられた河川愛護団体等は毎年度河川局長が表彰します。
●河川管理者および市区町村長はラブリバー制度の広報活動に努めます。

■豆辞典——私たちの水使用量は？

私たちが使う生活用水は、国土庁水資源白書平成2年版によると、全国平均で1人1日当たり約311リットルです。最高が沖縄の357リットル、最低が北海道の244リットル、四国は平均を若干上回る321リットルの水を使っています。

このうち私たちが身近に使う家庭用水は、全国平均で約220リットル。用途別水使用の実態は、1人平均200リットルを使う家庭の場合で入浴が64リットル（32%）、洗濯44リットル（22%）、トイレ36リットル（18%）、台所・その他56リットル（28%）となっています。

水事情の厳しい四国では、平成2年夏にも早明浦ダムがあわや空（最低貯水率24%）になるほどの水不足に見舞われました。こうした水不足に備えて節水を考えてみると、仮に毎日入浴している家庭が隔日入浴に控えた時、1人1日当たり32リットルの節水が可能となり、人口約423万人の四国全体にすると1日で13・6万立方メートルもの節水になります。また歯磨き中の水の出しっぱなしは1分間で約10リットルの無駄使いになると言われています。

このようなことから、日頃から水の使い方を考えて水を大切にする心がけが必要です。

ミツマタを見守る駅長さん

～川の恵みを撮り続ける～

琴電栗林公園駅 駅長（平成2年11月現在）
植村（うえむら） 好治（よしはる）さん

ミツマタといえば和紙の原料として有名だが、この木に咲く黄色い花を知る人は少ない。早春の渓流や杉林にひっそりと咲く野生のミツマタを、レンズで追い続ける駅長さんがいる。

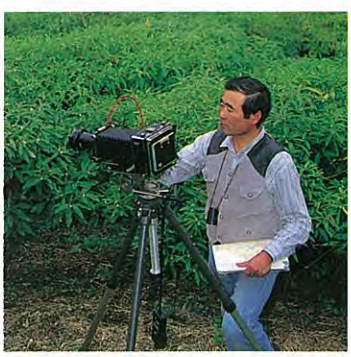
高松琴平電気鉄道株式会社、栗林公園駅の植村好治さん（四十五）がその人である。植村さんのカメラ歴はかれこれ二十五年。昭和五十九年には、この「あめんぼ」の第一回四国の川を撮るフォトコンテストで準特選に輝いている。「河川敷の春」と題した姉妹が吉野川の春を満喫する叙情的なものだった。昨年初めて応募した香川県展でも、一列に進むお遍路さんを塀越しにねらった作品が香川県教育委員会賞に入賞し、審査員を務めた写真家の細江英公氏から「時代を超越した姿を見る思いがする。すぐれたドキュメントだ」と絶賛されている。

自然の美しさに魅せられた植村さんはこのところ毎年のように、吉野川上流や剣山山系の東祖谷山村や山城町に出かけミツマタの花を追い続けている。氷柱の付いた岩をバックに凛と咲く一本の花、桜との別れを惜しむ群生の花。それぞれのミツマタが植村さんを早春の山に駆り立てる。

植村さんがミツマタを撮影する場所は支流を遡って行くため、まだミツマタの状態は悪くないが、時として切り取られたばかりの場面に出くわすこともあるらしい。「たった一本の野生の花を……。生け花にでも使うんですかね」。この時ばかりは、ひたむきな人柄がにじむ植村さんの目が曇った。

駅長の仕事は隔日二十四時間勤務という激務だが「休日もよほどのことがない限り、家にはいませんね」と苦笑する。そればかりか、普通車での撮影に物足りなさを感じ、一昨年秋には4WD車に買い換える入れ込みぶり。以前は「たまの休みぐらい…」とこぼしていた奥さんの言葉も衰えを知らない情熱に負けてか、最近は「気をつけてね」に変わってきたそうだ。

「美しい…と感じたもの」をテーマに、川の恵みや自然の織りなす叙情を撮り続ける植村さん。今年もまた、自然が美しさを増す季節が近づいてきた。



河・川探索②

愛媛県

肱川

この地図は国土地理院20万分の1より

和ロウソクを生んだ肱川

～地域を明るく照らした清流～

愛媛県東宇和郡宇和町正信（標高四六〇m）を源に大洲盆地を流れ伊予灘に注ぐ肱川。本川延長一〇三キロメートル、愛媛県下最大の一級河川である。一市十一町二村にまたがる流域面積は千二百十平方キロメートルにもおよび、愛媛県全体の約二割の面積を占めている。また、支流の多さは全国でも五位にランクされ実に四七五本を数える。

肱川の名前は、ひじを曲げたような流れから付いたとされ、大洲市内でも激しく湾曲して大きい河原を作っている。

南予の山々をぬって豊かに流れる肱川は、流域各地に集落や産業を発達させてきた。その一つが内子町の木蠟（もくろう）

並み見物に訪れる観光客が大森さんの店に立ちより、実演を見ながら和ロウソクを買い求めている。

流域最大の大洲市は、まさに肱川とともに歴史を刻んできた町である。春は菜の花、夏は川まつりの花火と鵜飼、秋

肱川支流 小田川・内子町

内子の製蠟業は江戸から明治にかけて全盛を極め、市場は海外にまで広がっていた。製品の出荷は馬車で、時には小型の帆船に積んで肱川を下り、河口の長浜の港へ運び、そこから船で大阪方面へ送り出していた。重要伝統的建造物群保存地区に指定された八日市護国の古い町並みを歩くと、製蠟で財をなした本芳我邸、上芳我邸など漆喰塗りの大壁やなまこ壁を持つ豪壮な屋敷が並び、往時の栄華を物語っているようだ。

今もかたくなに伝統を守るのは、八日市の大森弥太郎さん（六九）ただ一人。大森さんは天保年間から続く大森和蠟燭屋の五代目で、木蠟を使った和ロウソクを製造販売している。大森さんが手づくりするウグイス色の和ロウソクは、長持ちしてススが出ないのが特長。全国から町

内子町八日市街道

はいもたき、そして冬は幻想的な朝霧と四季を通じて市民が親しんでいる。流域の人々は昔から再三の洪水に見舞われながらも、肥沃な土地や自然美、文化など大いなる肱川の恵みに感謝し、美しい流れを慈しんでいるようだ。

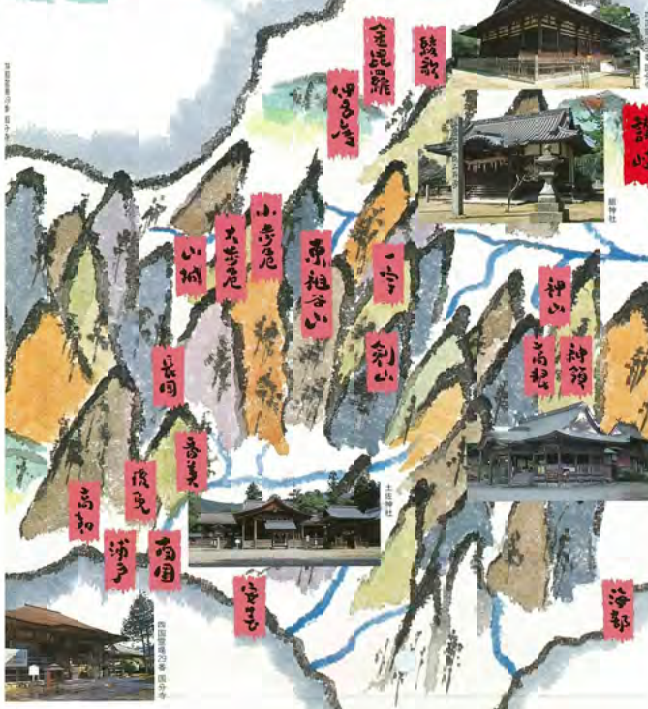
伊予の小京都や水郷と呼ばれ、しっとりした風情が漂う大洲市にあって、肱川の存在はあまりにも大きい。山水画のような臥龍山荘や富士山（とみすやま）にしても、肱川に重ね合わせるとその美しさが際立つ。大洲市観光協会の立花達雄事務局長も「肱川があったからこの町ができた。今は各地にあるいもたきも大洲が元祖。やっぱり肱川で取れたイモじゃないと……」と、ふるさと自慢。朝霧の晴れ間から姿を見せる〝母なる川〟は、今日もゆったりと流れている。

大洲市内肱川

「四国の川を考える会」事務局 〒760 高松市福岡町4丁目28-30 社団法人 四国建設弘済会内 TEL（0878）22-1177番

四国の地名

「あめんぼ」の四国特集第2弾は「四国の地名」。
地名には古事記、日本書紀に出てくるような古いものや自然の地形からくるもの、
土地の豪族の名前から名付けたもの、そして神社仏閣や職業集団の名前がそのまま地名になったもの、
さらに条里制の遺構が残っている地名など実にさまざまな由来がある。
地名は単なる場所の名前ではなく、長い歴史や文化の結晶が含まれており、
一つ一つの地名に対する興味は尽きない。
そこで今回は四国の代表的な地名のいくつかの起源を探ってみる。



写真の伊弉諾神社、観音寺、上一宮大瀧神社、土佐神社はそれぞれ伊予、讃岐、阿波、土佐の古名となった国をつかさどられています。

『四国』と云う名の由来は伊予之二名島から始まる。

四国の地名に関する記述は712年に成立したわが国最古の歴史書「古事記」の国生み神話に見ることができる。ここでは四国が「伊予之二名島（いよのふたなしま）」の名前で登場する。「この島は身一つにして面（おも）四つ有り。面ごとに名有り」とされている。

四つの面は讃岐国、伊予国、阿波国、土佐国。「二名」の解釈は「二並び」が一般的で、讃岐の飯依比古（いいよりひこ）と伊予の愛比売（えひめ）、土佐の建依別（たけよりわけ）と阿波の大宜都比売（おおげつひめ）の男女二神がそれぞれ一対となり、二つ並んで一つの島を形成していたというものである。

「二名島」の名称は、男女2カップルが並ぶ枠ならのであるが、二つの特徴を持った地域、すなわち現在の北四国は南四国の姿を見事にいい当てているようだ。

旧国名と国府、国分寺

讃岐国は飯依比古の国を賜った手間軽負命（たおさまおいのみこと）が矛竿を貢物にしたので竿調国（さおつきのくに）と呼ばれ、それが縮まって"さぬき"になったと伝わっている。また、讃岐国は東西二長（南北に短いところから「狭賀」と書いたともいわれている。

伊予の名前は、国の中央にある温泉（道後）に由来するらしい。"いで"ゆ（出で湯）"が"いよ"となり、さらに"い"に転化したという説が有力である。

伊予国は十四郡 ご十二郷で、国府、国分寺はともに越智郡桜井郷にあったと伝わる。四国霊場59番国分寺のあたりに、現在、今治市国分の地名が残っているが国府の置かれていた場所はいまだに判明していない。

阿波国は古事記にも「粟国」とあるように、古くより粟穀の生産が盛んであったところから、その名前が起こったと、われる。

延喜式や和名抄（倭名類聚抄）によると讃岐国は十一郡九十郷で、国府は阿野郡坤甲郷府中にあり、その元手里はどの阿野郡新居に国分寺があった。現在、国府のあった付近は坂出市府中町、四国霊場80番国分寺付近は綾歌郡国分寺町国分として、その名をとどめている。

延喜式、和名抄では阿波は九郡四十六郷からなり、国府、国分寺はともに名東郡名方郷にあった。現在の徳島市の四国霊場15番札所国分寺のある一帯に当たり、ここにも国府町の地名がある。

土佐国は古くは「土左」「都佐」とも書かれている。由来はいっきりしないが、南路志には浦戸港の海門が狭いことから「門狭（とさ）」と名付けられたという記述が見える。

延喜式によると七郡四十三郷からなり、国府、国分寺はともに吉岡郡宗部郷にあった。ここは現在、南国市になっているが、四国霊場29番国分寺周辺に国分の地名が残っている。

千年以上も生きる郡郷名

延喜式、和名抄はいずれも平安時代中期の90〜年代前半に編纂されたものであるが、この中に出てくる郡や郷の名前を見ると、現在もほとんどそのまま残っていることに気がつく。

郡（こおり）が郡（ぐん）に 郷や里が町名や大字、小字に変わっているものの、千年以上も生き続ける地名が多いのに驚かされる。

四国では土佐郡は安芸、香美、長岡、土佐、吾川、高岡（同）、幡多の七郡がすべて現在の郡名となり、阿波国では当時の九郡が現在十郡になっているが、これも郡質郡が平安末期に郡質郡と海部郡に分かれただけで、全部の郡名が残っている。讃岐の場合は十一郡が現在七郡に減っているが、これも阿野（あや）郡と鵜足（うたり）郡が一つになって綾氏（あやうじ）郡、那珂（なか）郡と多度（たど）郡が仲多度郡という具合に変化しただけの話である。

全国的にも古代の郡名を踏襲する所は多い。統計による現行郡名の三分の二くらいが古代から千年以上も引き継いでおり、そこに住んだ人々の地名に対する根強い愛着が感じられる。

人のドラマが作った地名

地名にはいろいろな由来がある。自然の地形からくるもの、神社仏閣から名付けたもの、地方の豪族の氏や人々のドラマから生まれた歴史的なもの、特産品が地名になったものまでさまざまなものがある。

愛媛県の道後は、伊予の国府のあった今治から道中どうばばたびに対し、その東方にあるところからこの名があるとされる。松山はお城のある山の美しい赤松の姿から命名し、宇和島は宇和郡の「宇和」と宇和島城の旧称の「板島」を合成してできたものといわれる。砥部焼で有名な砥部は古くから砥石を産出したところからこの名が生まれている。大洲はその昔、肱川に川の港がありよく大洲と呼ばれていたものを文洲に改めたという説が有力だが、大宝を盛んに作っていたことから名付けられたとも伝わっている。四国最高峰の石鎚山にその名の通り険しい山容で、典型的な地形からきた典型的な名前だろう。また松山市街を流れる御幸川（おとも）と伊予川が呼ばれる暴れ川だったが、見事に水を治めた足立重信という人物の名前をとり重信川と改めたという。日本の河川で人名がついているのは、この川だけだという説もある珍しいパターンだ。

高知県の足摺は、海路が足を引きずるほどの険しさからくる地名で、岬まで行けばなるほど実感できる。清流四万十川はアイヌ語の"シマムナ"（はるばるだ美しいうらぎた）説と、たくさんの支流を集めて流れるからとの説があるが、いずれも自然の形からきたものだろう。変わったところでは同国市の後免。

野中兼山が開墾した江戸初期のころ、新田開発の寺、新しい土地に出てきた者には屋敷の年貢や諸労役一切を免除して町の発展を図ったところから後免の地名が生まれたと伝わっている。

徳島は旧城の東にあった洲の名前で、徳島市が往古から水の都であったことがわかる。阿波市郡氏の里近に学校名がある。鳥部一族が教育のために設けた私学の名残をか忌部氏の末人が多く住んでいたところからの説があるが、独特の歴史が感じられる名前だ。大歩危、小歩危などの字の通り歩いても危ない場所の意味が含まれている。剣山はその名前から急峻な山容が連想されるがこの山の頂上は平